

## 10. 滋陰剤

滋陰剤は、陰虚証を治療する方剤である。

陰虚証とは、陰液全般の不足によるもので、血虚（栄養不足）とともに津液枯渴（脱水）を伴う。物質面の消耗とともに、代償性の異化亢進作用が起こり、却って熱証を呈する。これを虚熱という。

虚熱の程度が著明なものを陰虚火旺という。

陰虚証では、身体羸瘦して顔面は憔悴し、咽乾口燥、四肢煩熱に苦しみ、虚煩して眠れず、尿の量は少なく色は赤く、一般に便秘する。舌質は紅く乾燥し、舌苔は少なく、脈は沈細で数となる。

### 滋陰剤

六味地黄丸，炙甘草湯。

### 滋陰清熱剤

滋陰降火湯，清暑益氣湯。

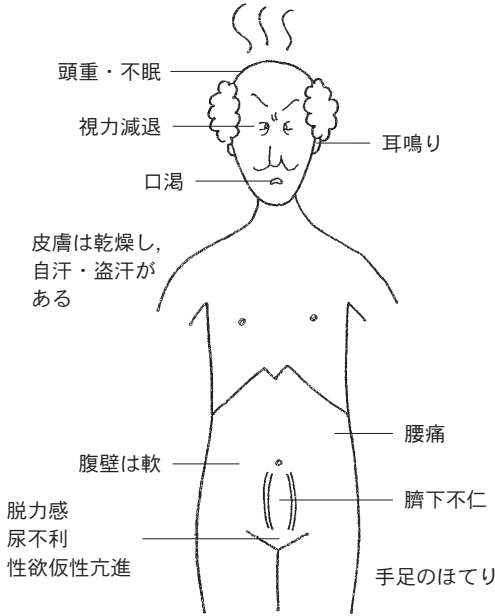
### 滋陰潤燥剤

麦門冬湯。

### 気陰双補剤

滋陰至宝湯。

ろくみがん  
**六味丸** (小兒薬証直訣)



**方意**

八味丸（八味地黄丸・p.154）より桂枝と附子を去った薬方であり、腎陰虚を治す養陰の主方である。腎虚の症状とともに、虚火上炎するので熱証・燥証（虚熱）を呈する。

病位は少陰・厥陰（腎・肝）。脈は沈数あるいは細数。舌は紅～暗紅色で舌体乾燥、無苔か微白苔。

**診断のポイント**

- ① 易労・頭重・耳鳴・腰から下の脱力感
- ② 尿不利・便秘・盗汗
- ③ 口渇・五心煩熱・不眠
- ④ 虚熱の諸症状

**原典**

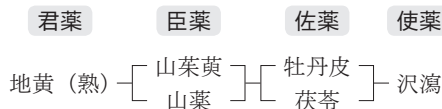
地黄丸，腎虚失音，凶開不合，神不足，目中白睛多ク，面色皃白等ノ証ヲ治ス。（『小兒薬証直訣』巻之下・諸方）

**処方**

ジュクジオウ（熟地黄）……………8.0 g	ブクリョウ（茯苓）……………3.0 g
サンシュユ（山茱萸）……………3.0 g	ボタンピ（牡丹皮）……………3.0 g
サンヤク（山薬）……………3.0 g	タクシャ（沢瀉）……………3.0 g

註）原典には蜂蜜で丸剤に作るとある。

## 構成



巽居中 (『紅炉点雪』) は、君薬は地黄、佐薬は山茱萸・山薬、使薬は茯苓・牡丹皮・沢瀉としている。牡丹皮・茯苓・沢瀉の3薬がともに佐使薬とも考えられる。

## 方義

地黄 (熟)：甘微温。滋陰，補腎。腎精を生ずる。	} 三補
山茱萸：酸渋微温。収斂の性質があり，肝を温め，下焦を引き締める。	
山薬：甘平。補脾の要薬であるとともに，虚熱を清し腎を固める。	} 三瀉
牡丹皮：辛苦微寒。涼血作用，陰火を瀉す。	
茯苓：甘平。利水作用。脾中の湿熱を滲泄して腎に通じさせる。	
沢瀉：甘寒。下焦の水邪を逐う。諸薬を腎経に導く働きがある。	

本方は、全体として肝腎が不足して、真陰虧損し、精血枯渇した状態に用いる。

本方は陰虚陽盛の方剂、八味丸 (八味地黄丸) は陽虚陰盛の方剂である。

## 八綱分類

裏熱虚証

## 臨床応用

疲れやすくて尿量減少または多尿で手足がほてり、時に口渴がある者の次の諸症：頭重，不眠，耳鳴り，むくみ，難聴，皮膚の痒み，小児の發育不良，腎炎，腎機能障害，慢性腎不全，肝硬変症。

## 類方鑑別

八味地黄丸：腎陽虚の主方である。身体機能が低下して、特に下半身の冷え・脱力などが著しい。

桂枝加竜骨牡蛎湯：精力減退・遺尿など腎虚の症状と、不安・不眠などの精神神経症状が強いが、虚熱の症状はない。小腹弦急と臍の上辺りに動悸を認める。(気血不足と虚陽上浮)

五苓散：口渴，多汗，尿不利，時に悪心嘔吐 (水逆)，表証を伴い内に蓄水。(下焦蓄水証)

猪苓湯：口渴，頻尿，残尿感，排尿痛。下焦で水熱が互いに結び、陰も損傷されたもの。

清心蓮子飲：虚証。軽い排尿痛や残尿感などに加え、神経過敏症状がある。気陰兩虚と心火旺。(心腎不交)